

『食べる子どもへの働きかけ』
—自分の吃音と向き合うために—

宇都宮市立雀宮中央小学校 高木 浩明

100分の3

昨年、校内の6年生100名に、食べる子どもたちの思いや願いを伝える授業を行った。その中で、食べる・吃音ということばを知っているか尋ねると、意味も含めて分かっていたのはわずか3名だった。ところが、連発や難発など食べる様子を説明すると、そういう話し方の人に出会った、テレビで見たという児童が86名になった。友だちや部活の後輩、お店に来るお客さん、外出先や親の勤め先など様々な場に出会ったという子どもたちにとって、食べる人は決して遠い存在ではない。食べる話し方に気付いていても、それを何と言えればいいか分からない、そんな子どもたちの姿がそこにある。

ところで、『吃音者宣言』(1976)には、7000人の小・中学生に「どもりの人やお友だちをどう思いますか」と質問した結果が載っている。当時は「どもる」ということばを、誰もが普通に使っていた。食べる人を見て「あの人は吃っている」と理解できたことが、このことから分かる。

成人吃音者から、子どもの頃「どもり」と馬鹿にされた悲しさや悔しさをたびたび聞く。ことばを知っているが故に、からかったり、いじめたりする場合もあるだろう。けれど現在は、まわりの友だちはもちろん、食べる子ども自身も自分の話し方を何と言うか知らずに、何なのか分からずに、ただ話し方をまねされたり、からかわれたりしている。そして、友だちと同じように話せないと一人不安に感じている。食べる事実はあってもそれを表現することばが存在しない世界に、食べる子どもたちが生活しているとすれば、それは何とも不安定で、危うい状況とは言えないだろうか。

小学生になるまでに 治さなければと 思ってた(1年) —— 吃音への気づき

子どもたちは、自分の話し方をどのように意識してきたのだろうか。この章の見出しは、1年生・男子のAさんが作った「どもりカルタ」である。初回面接で、彼は入学前の様子を次のように話していた。

- 担当者 Aさんはいつ頃から、食べるのに気付いていたの？
- 子ども 幼稚園から。6才の時。だって、しゃべった時に、何か・・・となってたから。
- 担当者 その時、どんなふうに思ったの？
- 子ども 大変だあ、早く治したいなあと思った。いっぱいやって、治したかった。声に出して、治そうかなあと思った。でも治らなかった。
- 担当者 いっぱいしゃべれば、治るかなあって思ったんだ。お母さんに言ったの、そのこと。
- 子ども 言った。どうしようねえって。治さなくていいよって、ママ言った。
- 担当者 お母さん、治さなくていいって言ったんだ。幼稚園の時に。
- 子ども ママ気付いてなかったのかな。わかんないからって言ってたから。
- 担当者 それで、早く治して、しゃべれるようにしなきゃと思ってたんだ。1年生になってからは？
- 子ども ちゃんとしゃべってなかった。
- 担当者 幼稚園の頃と、どもり方は同じ？
- 子ども 同じじゃないよ。幼稚園の時は、いっぱい吃っちゃった。「あー、あー、あー」ってなった。
- 担当者 そうなんだ。その頃、何かぼく悪いことしたのかなあとか思った？ぼくのせいだって。
- 子ども 思った。

担当者 | だから、なんとかしなきゃ、治さなきゃいけないって？

子ども | うん。

Aさんは、ことばの教室に来るまで、食べるということばを知らなかった。けれども自分の話し方が友だちや家族と違うことに気付く、話しづらいつ感じ、自分で何とかしようとしていた。

6年生・男子のBさんは、幼稚園の時「弟はなっていないのに、何で僕だけと思った。それで、治そうとしたけど治せなくて心配になった。」という。自分の話し方を意識しても、それが何なのか分からない。「自分だけ」という思いの中で、何とか治そうとしたけれど上手くいかない。そんな経験を、これまで何人もの子どもたちが話していた。Aさんは、さらに「小学校に行ったら、きっと上手なしゃべり方の勉強があると思っていた。でも、そういうのはなくて、どんどん心配になった。」と教えてくれた。

子どもたちは「食べる」ということばを知らないけれど、それは決して食べることに気付かないわけでも、気にしていないわけでもない。子どもたちは、ことばの教室に来る遙か以前から、当事者として自分の吃音の問題に向き合っている。そう考える方が、自然だと思う。

世界中 どもる子いるんだ ほっとした（3年）—— 吃音と出会う

ことばの教室に行くことになり、何か「ことば」に問題があるのだろうか、不安な気持ちを募らせる。こうした様子は、構音障害の子どもたちにも見られる。ただ構音障害では、友だちや幼い兄弟など身近に同じようなしゃべり方の子がいる（いた）ことが多く、「自分だけ」という感覚は少ない。

担当者 | ちょっと見て欲しいものがあるんだ。これなんだけど。

子ども | 何？これ、何？食べる人？

担当者 | これは、今年の夏に食べる子どもたちとキャンプをやった時の写真なんだよ。

子ども | みんな、食べるの？大人の人も？

担当者 | え〜と、みんなじゃないけど。子どもたちは、ほとんど。大人は、半分くらいかな？

子ども | 大人は、1人、2人、3人、・・・11、12。この人は？（大学生を指さして）

担当者 | この人は先生じゃなくて、子どもの頃からキャンプに来ていた人が、大学生になって手伝いに来てくれたんだ。

子ども | 食べるの？

担当者 | そうだよ。・・・こんなに食べる人、大人とかもいるけど、どう思う？

子ども | 良かったなあって。ひとりじゃなくて。

食べる子どもにとって、この「自分だけ」という感覚が、「何なんだ、どうしてなんだ」と心配な自分の話し方を、さらに不安なものにしていく。Aさんは、たくさん食べる子どもや大人が元気いっばいに写る写真を見て、にっこり微笑み「よかった」とつぶやいていた。そんな彼や、同じようにほっとした表情を見せた子どもたちの姿から、「自分だけじゃないんだ」と知ることが、吃音を学ぶスタートラインではないかと感じてきた。「あなたの話し方を食べるって言うんだ。」「同じ話し方の子や、それから大人もいる。」「ずっと昔から、食べる人はいる。」と話すことは、「だから、自分だけのこととして吃音を抱え込んだり、一人で悩まないで」という思いを知らせることでもある。そういう吃音との出会いにすることが、ことばの教室の担当者として、まず、やれることではないかと考えている。

治らない 治したいけど 治らない（成人吃音者）—— 事実を伝える

ことばの教室に、子どもたちは治したい、治そうと思いやってくる。原因が分かっている、治す方法が確立していれば、子どもも担当者も、どうすればよいか悩むことはない。けれども、吃音を根本的に治す方法は見つからない。だから「自分には治せない。」ことを伝えなければならないと、私は考えている。それは、決してサラッとと言えることではない。重い事実である。しかし、このことを避けて、子どもたちと共に歩んでいくことはできないと覚悟している。

初回面接の中で、「吃音は変わっていくけれど、あなたのどもりがこれからどんなふうになるかは

分からない。治らないかもしれない。そして、自分には治すことはできない。」と、率直に伝える。その上で、どうして治したいと思うのか、一緒に考えていく。子どもたちには、それぞれ治したい理由がある。恥ずかしさや不安、真似されて嫌だった経験、スムーズに言えないもどかしさや辛さ等々、じっくり聞いていく。そして一緒に考える。その中で、治したいだけでなく、治さなければならない、吃ってはいけなと考えている子どもたち姿が、次第に見えてくる。「ゆっくり」「落ち着いて」と言われたと、治さなければならないと考えた理由を話す子もいたが、「よく分からないけど」「何となく」とこれまでの経験から、少しずつそう意識するようになったと伝えてくる子が多い。そのことを確かめ、本当に吃ることはいけないことなのか、治さなければならないのか、さらに一緒に考える。

もう一つ子どもたちに伝たい事実がある。それはどもりながら毎日学校に通っている子どもたち、仕事に就き、結婚をして生活している大人たちがたくさんいる。そして、吃らない人と同じように、時には悩んだり、苦しんだりするけれど、普通に生きている。またどもりを隠したり、治したいと時々思うけれど、生きることからは逃げずにいる。そういう姿を、自分はこれまで直接あるいは本やビデオなどで間接的に数多く出会ってきたし、あなたもこれから出会えるということである。

そう伝えたとしても、子どもたちは単純に、だから大丈夫と思うわけではない。これまでの自分の経験や思いを見つめ直すためには、時間もプロセスも必要である。だから、こうした事実に関しては、繰り返し繰り返し子どもたちと話し合っていく。そうすることが大切だと思う。

事実を伝えることが、子どもたちにショックを与えることもある。悩むこともあるし、拒否する場合もある。その時は、どうして悩んだのか、拒否したいのか一緒に考える。こちらも、自分が感じ、考えてきたことをストレートに伝える。そんなやりとりの中で、子どもたちの考えの深さ、気づきの鋭さに驚かされることが多い。1年生でも、当事者としての自分をしっかり持っている。そういう子どもたちの力を信じるのが、子どもたちと共に歩んでいく基軸となっている。

そつと言おうと 気にするよりも 笑って元気にどもりたい(4年) —— 吃音の治療法

吃音の治療法の学習は、吃る症状を治そうとするこの限界を知ることでもある。その上で、どもりが治るといのは、どんな状態か考える。吃音からマイナスの影響を受けずに生きている人たちがいることを、知らせることに繋がっていく。

子どもたちと、これまで実際に行われてきた14の治療法(右表)について、そういう方法があったと思うか、また自分がやってみたいと思うか考えた。Cさん(3年・男子)は『ゆっくり話す』が一番効果ありそう。だけど、本当に治るなら、大人もみんなやっといそう。でも……そうではないし、ゆっくり言うのは、目立って、恥ずかしいから、やってみようとは思わない。」と、表にチェックを入れながら話した。

全部あったと伝えると、「びっくり。手術や電気ショックなんて、すごいもある。もし、ほんとに手術で治るとしても、痛いのは嫌だし、吃ったままでも生きていけるから、どうするかは分からない。病気じゃないから、治るから全員しなきゃならないものではないし。」そして、「これだけ科学が発達してるんだから、もし治せる方法があるなら、みんながやって、どもりがどんどん治ってると思う。そしたら大人の吃る人なんかいなくなる。けどそうじゃないから、どれも『治せる方法』になっていないと思う。」さらに「本当はどもりのことをみんなに伝える人になればいいのかも。子どもは、学校やことばの教室で、教えてもらえるけど、大人がちゃんと分かっていないと、電気ショックみたいな大変なことになる。吃る大人も、親も、吃らない人も知らないといけない。総理大臣とか有名になって、それから本当の吃音のことを話せば、

吃音の治療法ワークシート (Cさんの記入結果)

	治す方法	予想	自分
①	極端にゆっくり話をする	○	×
②	音を長く引き伸ばして発音する	○	×
③	呼吸練習をする	○	×
④	舌の手術をする	×	×
⑤	電気ショックを与える	×	×
⑥	催眠術を使う	×	×
⑦	飲み薬を使う	×	×
⑧	何か器具を使う	○	○
⑨	イメージトレーニングをする	○	○
⑩	断食をする	×	×
⑪	おまじないや祈禱をしてもらう	○	○
⑫	早口ことばの練習をする	×	×
⑬	はっきり発音する練習をする	○	○
⑭	気持ちを強くするための精神修養	○	×

みんながどもりのことを分かってくれる。そうすれば、吃ったままでも大丈夫になる。」と、自分の考えをまとめていった。Cさんは、吃音が治るんだったらその方がいいし、治したい気持ちもあるという。けれども自分が生きやすくなるかは、友だちが自分や吃音をどう受け止めてくれるかで、吃らずに話せるかどうかではない。「吃る自分が認めてもらえれば、悩むことはない。」とも話していた。吃音を治すことはできなくても、吃音とどう向き合っていけばよいか考え始めている姿がそこにある。

怖かった どもりの勉強 するまでは（1年）—— 吃音を学ぶ

子どもたちにとって、吃音を学ぶことは、自分が吃音の問題に対して何ができるか考え、吃音と共に生きる生き方を探すことでもある。そこでは、時々自分の思いを言語化して、その中から、自分にとって吃音の問題は何か、吃音からどんな影響を受けているのかに気付くことや、自分が変わってきたこと、変われることを確かめることが、大きな力になる。それ故、学習プログラムがあって、それを一通り学べば、知識を得れば、吃音と向き合えるといったものには、容易にならない。

すでに、子どもたちは、吃音が症状だけの問題ではなく、気持ちや行動などに影響を与えていることを漠然と意識し、その中で生活してる。けれども、そのことをじっくり見つめ直し、ことばにすることは、しんどいことでもあり、不安を感じる時もある。だから、同行者として、一緒に吃音を学び、時には悩みながら取り組むことが、子どもたちへの援助になると考えている。

ここでは、吃音を学ぶ・自分を知るということに焦点を当てた3つの取り組みを紹介する。

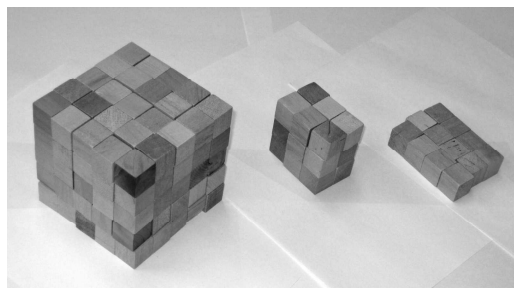
楽になる 吃っていいと 決めたから（成人吃音者）—— 吃音と向き合う①「言語関係図」

ウェンデル・ジョンソンの言語関係図は、吃音の問題を3つ要素を組み合わせた立体として捉えていく。

X軸：自分のどもり方

Y軸：まわりの人が、自分が吃った時に、どんなふうに反応しているか。受け止めているか

Z軸：自分の吃音とまわりの反応に対して自分がどう考えているか、悩んでいるか



それぞれの状態は軸の長さで示され、出来上がった箱（立体）が問題の大きさや特徴を表す。大人の場合は、平面図から立体の形や大きさを想像できるが、高学年の児童でも、図だけで立体の様子を考えることは難しかった。そこで、各軸が一番大きな状態（5×5×5）と、今の様子、こうなって欲しいという3つの立体を、写真のように積み木を使って、実際に組み立てながら考えた。

子どもたちは、立体の形や大きさがどんどん変わっていくこと、特に大きさに関しては、実際に積み木を数えると、変化がはっきり分かり、Y軸やZ軸がちょっと変わるだけで、積み木の数が半分、1/3、1/5と小さくなっていくことに目を輝かせていた。また、この取り組みを通して、自分の中にある吃音の問題を外在化し、変化するもの、自分の力で変化させられるものと、再確認していった。

Bさん（6年）は、吃音を知らせる授業の前後での変化を「みんなにどもりのことを知ってもらったから、Yが小さくなると思ったけど、Zも変わってた。自分では、どもりを気にしないと思ってたけど、みんながどう思うか心配だったのかなあ。」と、話してくれた。そして「中学校に行くと、違う学校の人と一緒にいるから、Yが大きくなるし、そうするとZも変わるかもしれない。そしたら、ちょっとずつまわりの人にどもりのことを、分かってもらえるようにして、それでZを小さくする。」「そう思っていれば、そんなにZが増えない気もするけどね。」と、これからの自分も、想像していた。

Cさん（3年）は「この箱に色をつけたらおもしろいね。」「小さくなると、赤が青になったり、色が薄くなる感じだ。」と話していた。吃音の問題を、自分の中に抱えていた時には、「真っ黒だったのが、外に出たら違う色になったし、（箱が小さくなっていく様子を見て）その色も変わったりする。何だか、そんなに心配じゃなくなったし、これぐらいならあってもいいかなって思った。」と学習の振り返りにまとめていた。

Dさん（3年・男子）は、「グループ学習の時、いっぱい食べていても平気という人と、ちょっとしか食べていないけど、食べるのが嫌だっていう人がいた。これを見ると分かるよね。ここ（Y軸）とここ（Z軸）の差なんだよ。」と、大発見したという表情で話し出した。具体的にどうすればいいかは、まだ分からないけれど、積み木の形や大きさを変えながら「箱は変えられるんだよ。」とも話していた。

3人を見ていくと、この課題を考える材料とする中で、何を学ぶか、どんなことに気付くかを、どんどん変化させていく。子どもたちは自分の問題として、しっかり向き合い、考えている。

隠そうと すればするほど 吃っちゃう（2年） —— 吃音と向き合う②「吃音の冰山」

ジョセフ・G・シーアンは、吃音は冰山のようなものであり、表面に出ている吃音の症状だけでなく、感情や考え方、行動など水面下の部分を見なければ、吃音の問題は捉えられないとした。

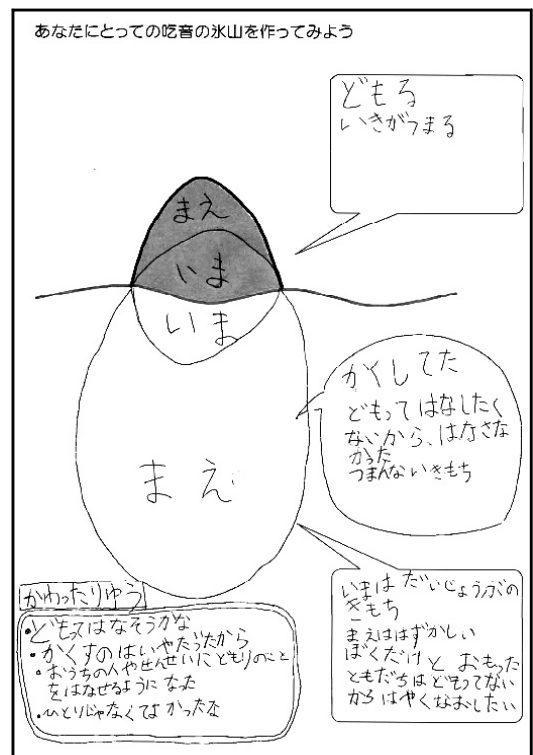
Dさん（3年）に「氷山の上」を尋ねると「いつもは3回続いちゃう。時々だけど、息が止まっちゃうことがある。」と、答えた。さらに、「氷山の下は？」と問い掛けると、今度はじっくり考え、まず「苦しい。息が止まった時とか、苦しくなる。今は、そんなにすごくじゃないけど。」そして「言葉を変えて言いたいことが言えない。」「どもるから意見が言えない。」と教室での様子を振り返る。さらに「早く言いたい。みんなを待たせたくない。」「楽になりたい。つらい。」と気持ちを書き込む。そして「気持ちはなかなか変えられない。変えられるのは、言葉を変えることや、早く言おうとするところかな。」と、自分がこれから取り組めそうなことも伝えてくれた。

Cさん（3年）は氷山の下に、「幼稚園の時、真似したり、ばかにする子がいた。」「やだなー、はずかしい。」と、書き込んだ。そして「1年生の時は、まわりの子が『かんだ』とか言ってきた。その子の言い方とかで、変な感じがして、治さなくちゃと思った。」「今なら『小さい頃からこうなんだ。しょうがないだろう。』くらいは言えそう。そう思えるから前よりは恥ずかしくなくなった。」と、これまでの様子を話してくれた。「今はどうなの？」とたずねると、「音読や発表で……わざと最後にしたり、しなかったりする。」「どもるのがだめだとは思わなくなったけど、行動はなかなか変えられない。やだな（という気持ち）はもっと変わらない。」と話していた。

子どもたちは、氷山の下が大きいたいと思いたくない気持ちから、何度も線を書き直していた。その中で、自分の書いた氷山を、客観的に捉え始め、「上と比べたら、やっぱりこれくらい」と、一回り大きく書き直したり、「なかなか変わらないところ」と、氷山の底の部分を細長く書き足すなど、大きさだけでなく形も意識しながら、自分にとっての吃音の問題を表していた。Dさんは「ことばの教室に来て、このぐらい（氷山の下）の小さな部分が無くって、自分でいろいろ考えたから、ここ（氷山の下部、三分の一ぐらい）が変わった。どもってもみんなちゃんと聞いてくれるって分かったから、その分も小さくなるかな。」と、これまでの変化を書き込んでいた。

Aさん（1年）は、「どもりのことを家族や先生に話せるようになって、楽になった。一人じゃないと分かって安心したから、吃って話そうかなあとと思うようになった。本当は隠すのは嫌だった。」と、氷山を見ながら、話してくれた。そして、隠そうと思っていた時よりも、吃っていいやと思うようになってからのほうが、氷山の上も小さくなったと線を描いた。

子どもたちは、これまでの経験から、氷山の下部分は、自分が変えていけるものだと捉えている。「そんな簡単じ



ゃないけど」と言いながら、前向きに吃音の問題に取り組もうとする気持ちが、その後の子どもたちの様子から、確かに感じられた。「どもり方が変わって、上が小さくなったら嬉しいけど、それだけじゃあ下は変わらないね。」と、自分が吃音の問題とどんなふうに関わっていくか考えている様子も見られた。

今はムリでもほんとは伝えたい どもりのことを (3年) —— 吃音と向き合う③「ジョハリの窓」

「ジョハリの窓」は、まわりの人が自分のことをどのくらい知ってると思うかを縦軸のスケールに、自分自身が自分をどのくらい知っているかを横軸のスケールにして、自分という窓を4つに区切り、それぞれの小窓の大きさから、自分がまわりとどう関わっているか捉えようというものである。子どもたちには、自分が4つ窓になる、ちょっと不思議で面白そうな学習となった。自分を客観的に捉える道具を得たことで、シートに記入しながら「こっち (I・解放の窓) がもうちょっと大きい方が、楽かなあ。ちゃんとどもりのことを言えればいいんだ。」と、どんどん自分で学習を進めていく。

今回の学習では、食べる自分と、それ以外の自分をそれぞれ図示した。ほとんどの児童が食べる自分について、隠された窓〔Ⅲ〕が大きくなったが、「(食べることを) 隠してないから、みんな知ってるよ。」と、大きさは多少違うが、解放の窓〔Ⅰ〕もしっかり作った。Aさん(1年)は「ことばの教室に来るまでは、どもりのことが分からなかったから、こっちの方〔ⅠとⅢ〕が小さくて怖い。今は大きくなったからよかった。」と嬉しそうに話していた。食べる以外の自分では、全員、解放の窓〔Ⅰ〕が大きくなった。

これからどうなりたいか質問すると、食べる自分と、それ以外の自分の2枚のシートを見比べ、「同じようにⅠが大きくなった方がいい」という児童と、「(Ⅲの方が大きい) 今のままでいいかな」という児童に分かれた。そして「本当は、みんながどもりについて

		自分自身が	
		知っている	知らない
まわり人が	知っている	解放の窓 Ⅰ 自分も分かっており、他人も知っている自分	見えない窓 Ⅱ 自分は気付いていないが、他人が知っている自分
	知らない	隠された窓 Ⅲ 自分には分かっているが、他人には分からない自分	未知の窓 Ⅳ 自分も他人も気付いていない自分

ちゃんと知ってくれれば、楽になる……だけど、『食べる』ということばだけじゃないから大変。」「言わなきゃ分からないけど、分かってもらいたいことがいっぱい、時間もかかりそう。」と、どうすれば解放の窓が大きくなるか理解しつつ、それが大変だと感じ、戸惑う様子が見られた。

そして「もし笑う子とか出てきて大変になったら、みんなに知ってもらわないとダメだよな。」「4年生の教科書に『どもり』のことが書いてあって、それでみんなが分かったら一番楽だけど、(出てないから) 自分で言うかな。」「どんなことを言えればいいのか分かったら、きっと言えるよ。」と、話してくれた。未知の窓について、「これがいっぱいだと、一人ぼっちな感じで、心配になる。」とも話していた。

ジョハリの窓は、単純に解放の窓が大きい方がいい、大きくすればいいというものではない。吃音は、話し方はまわりから見えても、それだけで吃音とは何か、本人がどんな影響を受けていて、何が問題になっているのか、見えてはこない。食べる子どもたちにとっては、むしろ隠された窓〔Ⅲ〕の自分の中に、吃音と向き合っている自分、大切にしたい、しなければならない自分があるとも言える。でもその自分を守るだけでは、まわりの人に吃音を分かってもらえない。Ⅲの自分の中から、大変だけれど、伝えられる部分を見つけていかなければならない。そう子どもたちは気づき始めている。

安心して 吃れる世界に なってほしい (4年) —— 吃音を伝える

吃音についての授業を行った6年生に感想を聞くと、初めて食べる・吃音を知ったことで「良かった」と感じている子どもたちが多かった。「これまで食べる人に会って、ビックリしたり、変だなあと思ったり、落ち着いてと言ってしまったけれど、これからは食べる人と普通に接していきたい。」「食べる人はつらかったり、もどかしかったりすると思う。その中で生きていくことがすごい。だから食べる人が、普通に生きられる世の中になってほしい。」「こんなに食べる人がいるなんて知らなかった。きっとこ

れからどこかで食べる人に出会うし、その時自分がどうすればよいか、ちょっとだけ分かった。」そう考えられるようになったことを「良かった」と表現している。そこには、どもりについて特にマイナスに思ったり、差別的に捉える様子は見られなかった。そんな子どもたちの受け止め方がある。

このことを、通級している子どもたちに伝えると、「どもりのことをみんなに言うのは、怖かったけれど、ちょっとはそうじゃないと思えるようになった。」「いつかは、言えるようにしたい。」そんな声が返ってきた。「でも、今は無理。」と言う子どもたちと、これからどうすればよいか、どんな取り組みをすればいいのか、まだまだやらなければならないことはたくさんある。そのことを確かめることもできた。ちょっとだけ前に進むことができた、と感じている。

〈参考文献〉

どもる君へ いま伝えたいこと 伊藤伸二 解放出版社 2008

治すことにこだわらない 吃音とのつき合い方 水町俊郎 伊藤伸二 ナカニシヤ出版 2005